



小野田健太

Kenta Onoda

1996年福井県生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業、同大学院修士課程修了。第86回日本音楽コンクール作曲部門入選、第30回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞。2018年度明治安田クオリティオブライフ文化財団奨学生、20年度福島育英会奨学生、21年度ロームミュージックファンデーション奨学生。これまでに作曲を若林千春、鈴木純明、フレデリック・デュリユーに師事。現在、パリ国立高等音楽院作曲科第一課程に在学。

■ 第30回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞記念サントリー芸術財団委嘱作品

『綺羅星』

2台のピアノとオーケストラのための (2021~22)

●プログラム・ノート

étoiler /e-twa-le/ 他動

①【文】[空]に星をちりばめる

②【文】…を星をちりばめたように飾る

(旺文社『プチ・ロワイヤル仏和辞典』第5版)

「……私めは、過ぎゆく風に星を散りばめてみせましょう。……」

この作品は、「メロディの断片」「隣り合う複数の音高からなる音の塊」という2つの素材を中心に作曲されています。儂くこぼれ落ちてゆく音のかげらを拾い集めるように、2人のソリストがごく短いメロディを紡げば、オーケストラは脆い粒状の音響でそれを支える、というところから曲は始まりますが、その刹那的なメロディとやわいサウンドが堆積するうちに、ソリストのメロディは鈴生りの和音の連続へと為り変わり、オーケストラもその輪郭を鮮明なものへと変化させてゆきます。

特に作品の後半、2人のソリストは「音の塊」を奏で続けます。ピアニストが指先に神経を集中させ、力をこめて鍵盤を勢よく押し下げると、いくつもの弦とハンマーがぶつかり合い、その衝突は弦を振動させ、複雑な共鳴を生み出します。そのときの、火花がぱつとはじけるような、空気がびりびりと震えるような感覚に、いつも魅せられています。ピアノの「音の塊」がオーケストラに放たれると、オーケストラは異なる質感の「音の塊」を投げ返し、そして音楽は展開してゆきます。

2Pf-3Fl(2Picc/A-Fl)/3Ob(E-Hrn)/3Cl(Es-Cl/Bs-Cl)/2Fg/C-Fg-4Hrn/3Trp/3Trb/Tub-4Perc(I=Timp/2Wood Blocks/Flexatone/Spring Drum/Bamboo Chime/Police Whistle/Slide Whistle/Vib/2 Antique Cym II=Timp/Chinese Cym/2 Tom-Toms/Ratchet/Bar Chime/2 Mokushos/Tubular Bells III=Sizzle Cym/HI-Hat/Snare Drum/Lion's Roar/Sleigh Bells/Rainstick/Vibraslap/Kazoo/Mar/Wine Glass IV=Bass Drum/Suspended Cym/Ride Cym/2 Rototoms/Maracas/Tri/Anvil/Glass Chime/Bird Call/Glock)-Hrp-Toy Piano(Cel)-Strings(14-12-10-8-6)



波立裕矢

Yuya Haryu

1995年8月17日茨城県生まれ、千葉県育ち。2018年愛知県立芸術大学卒業、21年東京藝術大学大学院修士課程作曲専攻修了。第35回現音作曲新人賞受賞、第89回日本音楽コンクール作曲部門第1位。これまでに作曲を鈴木純明、小崎光洋、山本裕之、久留智之に師事。作曲の会「たんぼぼ」共同代表。

■ 第32回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『失われたイノセンスを追う。II』

オーケストラのための (2020~21)

初演 2021年6月4日 東京藝術大学奏楽堂
藝大現代音楽のタベ「創造の杜 2021」

●プログラム・ノート

本作の作曲にあたって、私は村上春樹の短編小説『かえるくん、東京を救う』のプロットからヒントを得た。

同作はいわゆる「アンチ・ヒーロー」の構造を持ち、「ヒーロー」ものに不可欠な勧善懲悪の図式が脱構築されている。例えば、同作で善の象徴(ヒーロー)として描かれる「かえるくん」は、2メートル大の蛙というキツメな外見で、東京に壊滅的な被害を及ぼす地震を起こそうとする悪の象徴は「みみずくん」で、戦いは想像のなかで行われ、戦いのあと、勝利をおさめた「かえるくん」は損なわれてしまう……、という風に。

このようなドラマツルギーの脱構築をヒントに、私は自身の愛してやまないマーラーの交響曲第1番「巨人」第4楽章を徹底的に編集する方法によって作曲を行なった。

素材となるマーラーの音楽は、本作前半からの意外な展開に招かれる形で、中間部分から用いられ、総体として一定の明瞭さをもって認識される。しかしマーラーの音楽は、ときにげげげげ、ときに脆く、ときにエモーショナルに編集されることで、構造的に大きな逸脱を余儀なくされる。

しかし逸脱は、ロマンティックな音楽に介入するドラマをいたずらに無力化させるための「仕掛け」としてではなく、近代の音楽に対して、新たに共時的な物語を施すために、機能することになるだろう。

本作の構想は、愛知県立芸術大学在学当時の2017年から行われており、2作の「試作」をもとに本作へとたどり着いた。私としては、本作の完成をもって、構想の一種の完結を見ることができたように思う。ときに安直と言われかねない本構想の行く末を見守ってくれたすべての方々に感謝申し上げる。

タイトルは、私が創作行為によって行なっていることを端的に示しています。

3Fl(Picc/A-Fl)/2Ob/2Cl/Bs-Cl/2Fg/C-Fg-4Hrn/2Trp/2Trb/Tub-4Perc(I=Timp/Tri II=Bass Drum/Guero III=Wind Chimes/Drum Set/Tam-Tam/Wood Blocks IV=Tam-Tam/Vib/Xyl/Vibraslap/Flexatone)-Pf-Strings(12-10-8-6-4)



根岸宏輔
Kohsuke Negishi

1998年6月7日埼玉県生まれ。第37回現音作曲新人賞(あわせて聴衆賞)、第31回朝日作曲賞(合唱組曲)、2021年度武満徹作曲賞第1位を受賞。日本大学芸術学部音楽学科作曲・理論コース(作曲)を卒業後、現在は同大学大学院修士課程に在籍し、伊藤弘之に作曲を師事している。

■ 第32回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『雲隠れにし 夜半の月影』
オーケストラのための (2020)

初演 2021年5月30日 東京オペラシティ コンサートホール
2021年度武満徹作曲賞 本選演奏会

●プログラム・ノート

「めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に 雲隠れにし
夜半の月影※」—— 紫式部(970?-1041?)

これは、新古今和歌集に掲載されているうちの一首で、紫式部の詠んだ歌である。「久々に友人を見かけたにも拘わらず、確かに本人であるかどうか判断できないうちに、雲に隠れた月のように、すぐに友人は帰ってしまった」という意で、本作品の『雲隠れにし 夜半(よは)の月影』というタイトルはこの歌から引用し、また作品の内容についてもこの歌からインスピレーションを得ている。

本作品では、ふと現れたかと思えば埋もれて消えてゆくというように、[テーマや音響]などの推移が曲の流れの中に組み入れられている。それらの要素が流れの中から浮かび上がりまた消えることで、音楽は一点に留まらず、変容を繰り返し、形を変えながら発展する。

最終セクションでは、各々の楽器が千々に動くことで一つの音響体をつくりだし、次第にすべての楽器が同じ動きを見せるようになるが、その後散乱するというようなダイナミックな音の様子を描いた。音が躍動し、集まっては散らばることで、前半部分では穏やかに提示されていたテーマが、終結部分では激しい性格に変化し、オーケストラ全体を支配するようになる。

※結句は「夜半の月かな」とも詠まれる。

3 Fl (2 Picc) / 2 Ob / E-Hrn / 2 Cl / Bs-Cl / 2 Fg / C-Fg - 4 Hrn / 3 Trp / 3 Trb / Tub - 4 Perc (I=Timp / Antique Cym / Cym II=Vib / Anvil / Antique Cym / Suspended Cym / Tri / Bongo / Conga / Wood Blocks / Spring Drum III=Vib / 2 Anvils / Antique Cym / Tubular Bells / Mar / Xyl / Flexatone / Bass Drum / Suspended Cym IV=Bass Drum / Tam-Tam / Sleigh Bells / 3 Mokushos / Mar / Hi-Hat / Snare Drum / Bongo / Conga / Anvil / Spring Guiro) - Hrp - Cel - Pf - Strings (14-12-10-8-6)



大畑 眞
Makoto Ohata

1993年6月21日宮城県(登米市)生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科を首席で卒業、卒業時にアカンサス音楽賞を受賞。現在、同大学院音楽研究科2年次に在学中。令和元年度東京藝術大学宮田亮平奨学金奨学生、令和2年度長谷川良夫賞受賞。これまでに作曲を鈴木静哉、小鍛冶邦隆、望月京に師事。

■ 第32回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『ジंक』 (2021)

初演 2021年5月28日 東京藝術大学音楽堂
藝大定期 第404回 藝大フィルハーモニア管弦楽団定期 新卒業生紹介演奏会

●プログラム・ノート

本作品で素材となった音楽は、宮城県登米市に伝承される「長谷山甚句」のお囃子である。この音楽を素材としてオーケストラ作品に投影する場合、伝統的なオーケストラは異化される必要があると考えた。オーケストラの異化(分解・再構築)の手段として、オーケストラの配置が伝統的なものから大きく変更されている。本作品においては管楽器群が中央に集まり、弦楽器は後方に追いやられているかのように配置される。また、中央に集まった管楽器群はその内部において、さらにいくつかの小アンサンブルに分割される。このうち主要な3つは、祝祭的情緒を想起させる集団(お囃子、チンドン、異国の軍楽隊)を意識してアンサンブル化されている。

本作品では「長谷山甚句」の素材が様々な方法で取り込まれている。第一に全曲を支配するリズム構造である。このリズム構造は、長谷山甚句の古いテープ録音をコンピューターにより自動採譜し、そこから得られたリズムを細分化し、あるアルゴリズムに基づいて再生成されたものを同時的及び連続的に配置することによって得られたもので、締め太鼓、宮太鼓、ヴィブラフォンはこの核となるリズムを全曲を通して徹底的に演奏し続ける。また先述の3つの小アンサンブルは、それぞれ異なったシーケンスで長谷山甚句の竹笛の旋律を演奏する。楽曲の後半、男声歌手らによって歌われるのは、長谷山甚句の謡の旋律である。これらの旋律素材は、毎回ランダムにデフォルメされた結果、同時的/異時的ヘテロフォニーが発生することとなる。

作品全体を俯瞰すると、打楽器群の核となるリズム・シーケンスと、小アンサンブルの固有のシーケンスが同時進行していくため、全曲を通してオーケストレーションが自動的に変化していることに気が付くだろう。楽曲の終盤では、長谷山甚句に特有の掛け声が男声歌手及びオーケストラのメンバーにより発せられ、本作品の祝祭的雰囲気強調する。

2 Fl / Picc / Ob / E-Hrn / Es-Cl / Cl / A-Sax / 2 Fg - 4 Hrn / Picc-Trp / Trp / Cornet / 2 Trb / Bs-Trb / Tub - 4 Perc (I=Shime-Daiko II=Miya-Daiko III=2 Atarigane / Glock IV=Vib) - Hrp - Pf - Cel - 3 Male Voices - Strings (6+6 / 5+5 / 4+4 / 3+3 / 2+2)